

昭和31年 広島大学教育学部修了、広島県各小・中学校長歴任、広島県廿日市市立佐方公民館長歴任。現在は「アーヴェル」嘱託。

超高齢社会を生きる～「名刺セールスマン」の挑戦～

2001年（平成13）年、私はそれまで長年関わって来た「教育」の世界から完全にリタイアした。68歳になっていた。周囲からは異口同音に「長い間ご苦労様でした。ゆっくり休んでください」とねぎらいの言葉がかけられた。

だが、私は、これまでとは、異質な仕事にチャレンジしてみたかった。何人かの人に「どんな仕事でもよいから」とお願いした。私は、ハローワークも初めて訪れた。

そこで、ネックになったのは、やはり年齢という壁であった。私は健康であれば何歳になっても働き、少しでも“報酬”を得ることが自立して高齢社会を生きていくために大切なことだと思っている。

一ヶ月程して、「うちの会社の名刺を配ってみませんか」とA建設コンサルタント会社のH氏から電話があった。予想もしていなかった職種に一瞬戸惑った。これまでの経験、実績、肩書きはなんの役にも立たないのだ。しかし、私は、心の底からうれしくお受けした。

「お世話になります。A建設です」名刺を差し出すたびに「あ、あなた、だあれ・・・」と言わんばかりの視線が返ってきた。緊張して小さな名刺が汗で指先から離れず震えた。これまで私にとって名刺は初対面の挨拶に交わす手段でしかなかった。それが今は、全く違う。私が配っている名刺が相手の目にとまり会社を印象付けなければならないのだ。私は焦っていた。先方に着くとまずトイレに入り鏡を見た。表情はどうか、汗をかいていないか、ネク

タイの歪みは・・・、毎日数枚のハンカチが手離せなかった。

そんなある日「なりふり構わずやらなきゃ仕事は取れんぞ！」何が気に入らなかったのか訪問先の若い担当者に怒鳴りつけられた。「どういう意味なのだろうか」私は悩んだ。

私の様子を察してか、H氏は私に言ってくれた。「どんなに頑張っても思うようになるものではない。一年や二年で成果の出る訳がない。でも名刺を配ることは、営業の原点なのだから・・・」それを聞いて私は、気持ちが楽になった。私は「名刺セールスマン」なのだ。自分に言い聞かせた。

そのころから、相手の目線、口元、表情などに気を配りながら笑顔(?)で名刺を渡すことができるようになった。手にも額にも汗をかくことはなくなった。こちらに気持ちの余裕ができると「ごくろうさん」と声をかけてくださる方もできた。背広の上着まで汗が滲み通るような夏の日や、寒風が雪を舞いあげズボンの裾から入り込む日もあった。それでも私は、肉体的に精神的に苦しいと思ったことはほとんど無かった。ただ“指名”のことだけは明けても暮れても頭から離れなかった。

ある日、帰社してみると「指名がありましたよ」と知らせてくれた。H氏は「全くの素人が、自分の誠意だけでここまでできたことは素晴らしいことだ」と言ってくれた。もちろん「ほめ言葉」であることは分かっている。しかし、私はこの日のことを生涯忘れないだろう。このチャンス(セールス)が与えられたことに唯々感謝している。人生はどのように生きても「楽しい」と思えるようになった。

この業界(民間企業)が甘いものではないことを身にしみて感じた。わずか数年間の経験が、それまでの私の人生観を変えた。私も73歳になった。私が、次に向かおうとする道は、どちらか。超高齢社会だからこそ多様な生き方が許されるはずである。

チャレンジする“人生”年齢制限はないのだから。